

「かながわ鶏」の普及に向けた衛生指導の1事例

県央家畜保健衛生所

松本 哲 松尾 綾子
田中 嘉洲 亀井 勝浩
荒木 尚登 和泉屋 公一

はじめに

「かながわ鶏」は、消費者や生産者から、神奈川県産の鶏肉を食べたい、神奈川県独自の肉用鶏を作りたいという要望を受け、県畜産技術センター(以下、センター)で8年の歳月をかけて研究開発され、平成28年4月から有償配布が始まっている。「かながわ鶏」の父系は軍鶏833系統、母系は岡崎おうはんという組み合わせで、雄は主に横斑羽毛となり、雌は主に黒色羽毛となる(写真1)。軍鶏系特有の喧噪性は認められず、おとなしくて飼いやすい性質をもっている。



写真1 「かながわ鶏」(左:雌、右:雄)

飼養している鶏が「かながわ鶏」と認定されるには、品種：軍鶏系のオスと岡崎おうはんのメスを交配していること、生産：センターで生産された卵、雛を使用し、県内で飼養されたものであること、出荷日齢は90日齢以上であること、飼養衛生管理基準を遵守していることという4つの基準を満たすことが必要となる。

「かながわ鶏」生産者を支える組織

「かながわ鶏」生産者を支える組織(図1)として、平成27年6月に設立された「かながわ肉用鶏推進委員会」があり、生産者・畜産関係団体・県関係機関等で構成されている。主な事業として生産体制の構築や販売戦略等を行っている。家畜保健衛生所は「かながわ肉用鶏推進委員会」で衛生対策指導を担っており、飼養管理指導を担っているセンターと連携しながら、配布先農場の飼養衛生管理基準の遵守状況の確認・指導等を実施している。

また、平成29年9月に設立された「かながわ鶏生産組合」は生産者のみで構成されており、生産者間の配布希望羽数の調整や販売等を担っている。

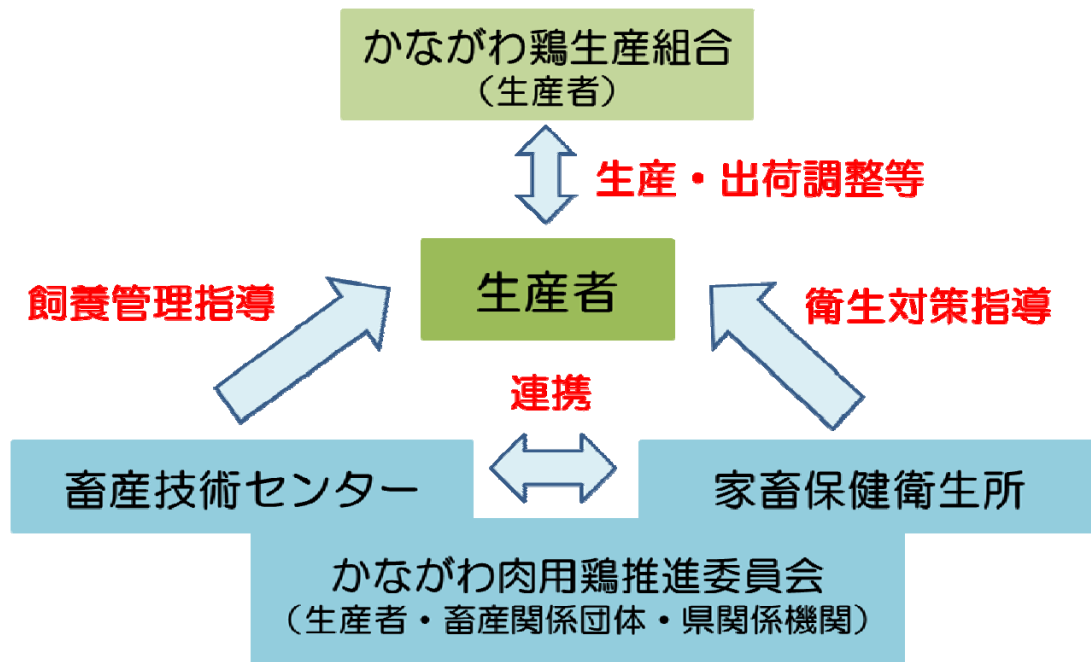


図1 「かながわ鶏」生産者を支える組織

県内配布状況

県内における「かながわ鶏」配布状況を示す(表1)。平成28年度から平成29年度にかけて県全体では8戸9農場に「かながわ鶏」が配布されている。A農場については平成29年度に諸般の事情により導入を中止したが、平成30年度については導入の再開を予定している。今年度配布された管内の農場はB、C、Dの3農場であり、A、B、D農場は採卵鶏飼養を業とする農場であった。

C農場については愛玩用として採卵鶏の飼養経験はあるものの、他の採卵鶏飼養農場と比較すると、養鶏の知識・経験等は少ない状況であった。そのため、県としてバックアップしていく必要があることから、平成29年7月から12月にかけて、飼養管理指導担当のセンターや地域の開業獣医師等と連携して指導を実施した。

表1 「かながわ鶏」の年度別県内配布状況

農場	管轄	28年度		29年度(※)	
		羽数	回数	羽数	回数
A	県央	316羽	2	—	—
B		14羽	1	136羽	5
C		—	—	72羽	3
D		30羽	1	110羽	2
E	湘南	157羽	2	305羽	3
F		11羽	1	627羽	4
G		—	—	370羽	4
H		—	—	400羽	3
I		—	—	400羽	3

(※)29年度は12月までの集計

衛生指導概要

1 農場概要

指導を実施したC農場の見取り図を示す(図2)。「かながわ鶏」の導入は8月下旬、10月中旬、12月中旬の3回に渡り、それぞれ約20羽から30羽の範囲で実施され、2ヶ所で飼養されていた。8月および10月導入鶏については屋根が設置された区画に飼養されており、12月導入鶏については屋根がある区画には飼養スペースが無かったため、管理棟の隣に置いてあったキャンピングカーのキャビン内で飼養されていた。

飼料についてはコストを抑えており、リキットフィーディングにおからと牡蠣殻を加えたエコフイードを利用していた他、飲用水については他の場所から水道水を運搬していた。

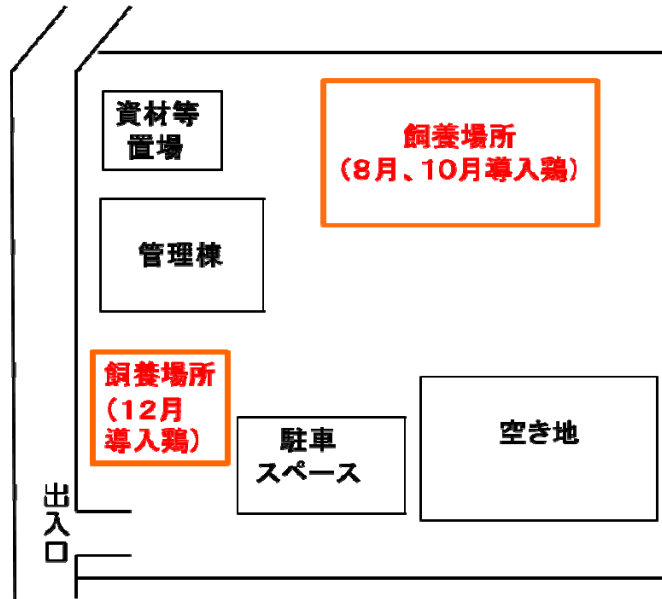


図2 C農場の見取り図

2 指導内容および結果

当該農場について、「かながわ鶏」導入前の7月下旬からセンター職員と共に指導を開始し、以降、12月中旬までおよそ月1回の頻度で計6回巡回し、巡回時の農場の状況に応じて飼養衛生管理基準の遵守の指導や飲水方法、ワクチン接種方法、防寒対策等の指導を行った。

(1)7月下旬

「かながわ鶏」を8月下旬に導入する前に、農場の状況をセンター職員と共に確認した。飼養者に対しては、飼養方法や鶏の病気等について説明し、衛生管理区域入り口の消石灰帯の設置、鶏舎入り口に踏み込み消毒槽の設置、鶏舎専用の長靴の設置、立ち入り簿や雛の導入・出荷の記録と保管等、飼養衛生管理規準の遵守について指導した。

(2)8月下旬

8月下旬に「かながわ鶏」が導入された3日後に、センター職員および地域の開業獣医師と共に農場の状況を確認した。「かながわ鶏」はケージ内で飼養されていたが(写真2)、防鳥ネットが一部ケージに掛かっていなかったことにより、ハクビシンと思われる野生動物に襲撃され1羽死亡したとのことから、防鳥ネットでケージ全面を覆うことを指導した。



写真2 8月導入した「かながわ鶏」の飼育状況

また、前回巡回時に指導した踏み込み消毒槽の設置を実施していなかったため、改善するよう指導した。さらに、飲み水を制限していたため、不断給与するよう指導するとともに、ケージ周囲が整理されていなかったため、整理整頓を指導した。

(3)9月中旬

再度開業獣医師とともに農場の状況を確認した。前回指摘した踏み込み消毒槽は飼育区画前に設置されており、防鳥ネットは全面を覆えるようになっており、さらにケージの周囲に金網が設置され、野生動物等への対策が実施されていた。また、飲水の制限給与は改善されていた。

立ち入り時には「かながわ鶏」の日齢が約50日齢になっていたため、センターが作成している「かながわ鶏」飼養管理の手引き¹⁾に基づき、ニューカッスル病・鶏伝染性気管支炎混合生ワクチンの接種を実施した。接種前に飼養者に対し、飲水・点眼・噴霧投与のそれぞれのメリット・デメリットを説明し(写真3)、開業獣医師とともに接種方法を検討した結果、点眼が選択された。この後開業獣医師とともに飼養者に対しワクチンの溶解・希釈方法、鶏への点眼接種方法等の指導を行い、飼養者は適切に接種を行うことができた。



写真3 ワクチン接種方法検討時の様子

(4)11月中旬

10月中旬に新たに「かながわ鶏」が導入され、11月中旬に再度状況を確認した。元々飼養されていたケージの向かいに、新たに飼養スペースが作られ、8月導入鶏が移動していた(写真4)。8月導入鶏の飼養スペースは網目の細かい防鳥ネットを使用していた他、10月導入鶏のケージにニップルドリンカーが設置されており、飼養者の飲水対策が進んでいた。

10月導入鶏については近日中に50日齢となるため、適切な時期にワクチンを接種するよう指導した。また、今後外気温が下がるため、寒さによる圧死防止用に土のうや風除けの板等の設置を指導したところ、10月導入鶏のケージへの土のうの設置がすぐに実施された(写真5)。



写真4 新たな飼養スペースの状況

写真5 ニップルドリンカー及び土のうの設置状況

(5)12月初旬

12月中旬に導入予定の鶏群について、本来の飼養場所にスペースが無い為、キャンピングカーのキャビンで飼養するという飼養者の連絡を受け、12月上旬に農場の状況を確認した。キャビンは管理棟の隣に置いてあり(写真6)、20~30羽程度の飼養スペースを有していた。飼養者に対してはキャビン内での作業用の長靴を設置し、8月や10月導入鶏が飼養されている区画に同じ長靴で入らないよう指導した。

また、キャビン前に踏み込み消毒槽を設置することを指導するとともに、キャビン周囲が雑然とした状況であったことから整理整頓を行うこと、飼養開始後は導入鶏のストレスとならないよう、換気や寒さに注意するよう指導した。



写真6 キャビン内部の様子

(6)12月中旬

12月中旬に新たな「かながわ鶏」がキャビンに導入され(写真7)、再度農場の状況を確認した。キャビン前に踏込み消毒槽が設置されたが、キャビン内作業用の長靴が設置されていなかったため、再度設置するよう指導したところ、飼養者はすぐに対応した。

また、キャビン床に糞が溜まるとアンモニア等で鶏群に影響を及ぼす可能性があるため、こまめな除ふんをするよう指導したところ、飼養者は1日1回キャビン床の清掃を実施するようになった。

さらに、夜間はキャビン内の温度が低くなることが予想されたため、コルツヒーターやガスブルーダー等の暖房器具の設置についても指導した。

なお、8月導入鶏は巡回5日前に139日齢で出荷され、10月導入鶏が8月導入鶏の飼養されていたスペースに移動していた。



写真7 12月導入した「かながわ鶏」のキャビン内での様子

まとめ

本事例では鶏飼養経験の浅い「かながわ鶏」飼養農場について、センター職員と共に導入前から継続的に指導を実施した。農場確認の際に、飼養衛生管理基準の一部項目について未実施の状態が見られたが、遵守を指導したところ改善が見られた。また、飲水が制限されていたため、不断給与を指導したところ、ニップルドリンカーの設置等、改善が見られた。ワクチンについては開業獣医師とともに接種方法を検討し、決定後は接種時に立会いながら具体的なやり方を指導した。

今回の事例からもわかるとおり、養鶏経験の少ない、「かながわ鶏」新規飼養者に対してはセンターと連携して、衛生管理と共に、飼養管理も含めたきめ細やかな指導が必要である。本事例の指導体制を、今後の新規飼養者に対しても活用し、「かながわ鶏」の普及を関係機関等と一丸となり推進していきたいと考える。

引用文献

- 1) 神奈川県畜産技術センター：「かながわ鶏」飼養管理の手引き、5(2016)